



第2回地方支援拠点機関等全国連絡協議会が開催

適切な支援で安定した 日常を取り戻すことができる

田辺和子

3月9日、東京都港区で、高次脳機能障害支援普及事業における第2回地方支援拠点機関等全国連絡協議会が開催され、都道府県の高次脳機能障害支援の担当者が集まり、事業の進展状況の説明があった。午後のシンポジウムで、田辺代表が発表した「サークルエコーの活動を通して」を紹介。

低酸素脳症は重度の人が多い

サークルエコーの会員30名が高次脳機能障害になった原因は、会の発足当時は喘息や水難事故の若者の割合が多かったのですが、最近は、働き盛りの若いお父さんの心筋梗塞が増えています。心筋梗塞32%、川や海、プールでの水の事故が14%、脳血管、喘息、交通事故がそれぞれ10%です。全体の9割が呼吸停止を経験した低酸素脳症です。

図は「高次脳機能障害」(橋本圭司著)に掲載されているグラフです。これによると、脳卒中の方は一番上のライン。発症時から数年にわたり回復し続けています。次の段の脳外傷の人たちもそれに似た回復の曲線になっています。

その2本の線が右肩あがりなのに対し、低酸素脳症は一番下、低い線が続いています。重度の人が多いというのはこの表にもあらわれています。

しかし、グラフでも、平らなラインが5年くらい続いた後に上向いているように、サークルエコーでも、

5年6年経つうちに、コミュニケーションがとりやすくなったと感じられる人が多いのです。「眠っていたのが動き出したようだ」と表現する家族もいます。一方、いくら目覚めたという感じの中で、パニックなどの精神症状を起こす人もいます。現在、精神症状への支援が少ないことも、サークルエコーの中では大きな問題となっています。

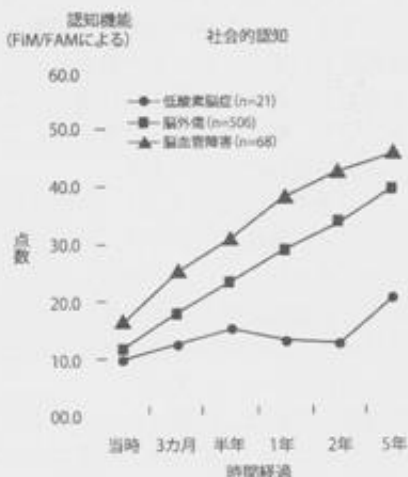
このグラフのもとになった、脳外傷の人たちの自立度に関する調査の中から低酸素脳症のデータをいただいて分析したところ(FIM/FAMによると)、低酸素脳症の人の自立度は脳外傷の人たちの半分以下、介助の度合いは3倍から4倍という結果になりました。私は、ADLレベルの介助が必要な人たちのことを、重度の人と申していますが、そう言う「車いすですか」と聞かれます。身体障害がないのにも関わらず、ADLの介助が必要な人のことが、あまり想像できないようです。まだ存在自体が知られていない段階のようで、話がかみあわないことが多いです。

また、そのような人たちは、手がかかり、お金もかかるけれど効果が少ないと思われているのかもしれませんが、ご自分の障害に気づくことで辛さを抱えることもある人たちに比べ、適切な支援で安定した日常を取り戻すことも多く、支援のしがいがある人たちでもあるといたいのです。難しいと敬遠する理由はありませんよといたいのです。ただし、適切な対応がなされれば、ということです。実際には、あまりにぞんざいではないかという対応で、かえって問題を生み出していることがあります。

認知症はムリと断られる現実

記憶障害のほかにも複合的な認知機能低下があると、DSM4など(※)の基準によって認知症という判断が下されることがあります。しかし、高次脳機能障害は、国際基準を超え、医学だけの基準を超え、わが国の制度とにらめっこする中で整理がされてきた概念です。さらに、厚労省は進行性でないものは高次脳機

図 高次脳機能障害者の認知機能の経過



資料:「高次脳機能障害」橋本圭司著 P49 新書

能障害とするのが妥当であるとの見解を出していますが、その考え方は支援の現場に普及しているとはいえません。水難事故で重い認知機能の障害が残った若者に、知的の作業所を希望しても「認知症はうちでは無理」と断られるようなことが実際にあるのです。

当事者や支援機関での混乱をなくす説明が一刻も早くなされるべきです。

※精神疾患の分類と診断の手引き

自立への支援が遅れている

私たちに寄せられる相談で多いのは、ひとつには病院から退院する先がないという問題、さらには、親亡き後という問題です。

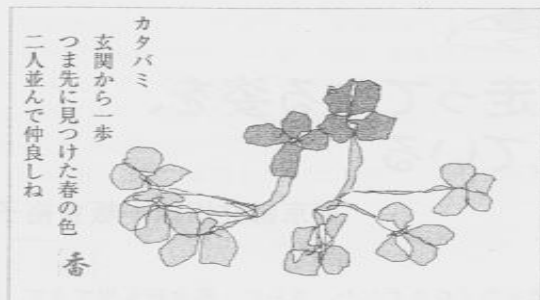
成人して独立して暮らしていた人が障害をもって親

のところに戻ってくる。高次脳機能障害の特性からみて、親亡き後という言葉はあまりに不合理です。つい先日、50歳の息子さんが高次脳機能障害になり、離婚して85歳の親御さんのもとに帰っていらしたことで、ご相談がありました。

成人までの子供を親が養育するのは当然のことです。それは障害があってもなくても同じこと。しかし、中途障害である高次脳機能障害は、自立していた成人に突然、支援が必要になってくる。その場合の新しい支援法を提示しなくてはなりません。

就労支援も、作業所も、住まいも同時に考える必要があります。デイセンターに通うのは家からだけでなく、グループホームからケアホームからという選択肢が必要です。

親亡き後、将来のことではありません。



カオ作

ギャラリー

ツネヨ作

